

西条周辺でも発生した1999年の集中豪雨による土砂災害

海堀正博 (総合科学部自然環境研究コース 助教授)

1999年は全国的に局地的な集中豪雨に悩まされた1年でした。あまりマスコミによって報道されることはなかったのですが西条周辺でも多くの土砂移動が起きたのです。ここでは、災害につながった雨はどんな降り方だったのか、災害はどこで発生したのか、どうして大きな被害を出してしまったのかを簡単にまとめてみることにします。

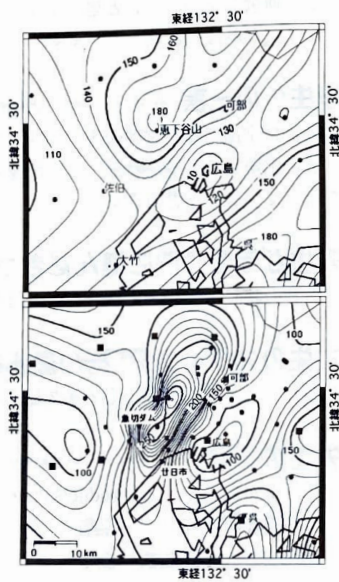
まず最初に誘因となった雨を見ていきましょう。

9月29日は朝から雨が降っていましたが、お昼ごろから急に強くなりました。広島市内の特に西部と北部ではすでに午後3時過ぎからパニック状態になっていました。しかし、後にふれるようにアメダス画面からは広島市内の混乱は読みとれませんでした。広島市佐伯区五日市町周辺には実際の観測雨量が1時間に81.0mmとなった地点を含め、時間雨量で60mm以上の猛烈な雨に見舞われていた区域が相当あって、多くの崩壊や土石流の発生地点と重なっています。しかし、広島市中区をはじめとするいくつかのアメダス観測点はこの強雨域からは離れた場所にあったため、豪雨の状況を的確に捉えることができなかったのです(図参照)。この図は、(社)砂防学会広島土砂災害緊急調査団(団長は筆者)のメンバーの牛山素行(京都大学防災研究所)さん作製のもので、アメダスの観測点によるデータだけで作製された雨量分布(上図)とその他の観測点でのデータも加えて作製されたもの(下図)とを比べるとその違いが明瞭でしょう。このようなせまいエリアに集中して強雨が降るといふ局地性の強かったことが今回の集中豪雨の最大の特徴のひとつであり、土砂災害に対する警戒や適切な避難に結びつけられずに大被害の発生につながってしまったことと密接に関係しているのです。

なお、同様な局地的集中豪雨は近年全国的にその発生頻度が増えてきており、たとえば1999年夏以降を見ても、東京23区内や千葉でも時間雨量で100mmや150mmを越える雨が観測されたりして大混乱につながっているニュースをごらんになった方も多いでしょう。ちなみに、東広島でも9月の台風16号のときには時間雨量で89mm、また、戸河内でも9月の台風18号のときに時間雨量で91mmという広島県の過去の記録を更新するような集中豪雨が観測されているのです。

では次に、土砂移動と災害発生場の特性について見ていきましょう。

土砂移動が発生した地点を調べてみると、地質や地形、植生などにいくつかの共通した素因が浮かびあがってきました。このような素因のある場所に誘因となる雨が降ったことが実際の土砂移動につな



平成11年6月29日の日雨量分布

(牛山作製)

上図：気象庁観測地のみ使用
下図：その他の機関の観測地を加えて作製。図中の黒点は観測所の位置を示す。

った理由です。といっても、ひとつひとつの土砂移動の規模は決して大きなものではありませんでした。それではどうして犠牲者が出るような大きな災害になってしまったのでしょうか。

災害となった場所は、ひとつはすぐ背後に急傾斜地(がけ)がある居住地であり、もうひとつは谷すじや谷の出口または扇状地に位置する居住地でした。がけを構成している土は水分が多くなると崩れてしまう可能性がありますし、谷すじはもともと水や濁流の通り道です。扇状地というのは過去の度重なる土石流や洪水の氾濫の結果としてできているものです。このようなことから、豪雨の際にはそのような危険性が出てくることは自然のことといえます。今回深刻な災害となってしまった場所の多くがこのように十分に危険が予想できるような場所だったのです。しかも、破壊エネルギーのまだ十分大きいうちに土石流などと遭遇してしまう位置に居住エリアが展開されていたのです。

広島県が土石流危険渓流数も急傾斜地崩壊危険箇所数も全国の都道府県中で最多であることは意外に知られていません。過去何度か全国一斉調査の結果が発表されてきましたが、他の都道府県の箇所数の動向に比べて広島県の増え方は著しいものがあります。このことは筆者の講義(パッケージ科目「自然災害と防災」や総合科目「人間と環境」あるいは副読本『21世紀の教養1 科学技術と環境』市川浩・小島基ほか著(培風館)など)でもお伝えしていますが、危険な状況を知らずに危険な場所にどんどんと人が入り込んでいっているのが現状なのです。行政の手による防災対策はなかなかその整備が危険箇所数の増加に追いつかないという状況になっているのです。

もちろん、今回災害が起きなかったところにもいくらでも同等以上の危険性が指摘できる場所もあります。すでに多くの人が住みついているところにはその上流に砂防ダム、治山ダムなどの施設整備を進めることが必要となるでしょう。これらの防災施設は土砂災害の発生に対して決して万能ではありませんが、土砂移動の勢いをゆるめて被害程度を軽減にする効果が絶大だからです。しかし、災害となるような土砂移動が数十年あるいは数十年に一回同じところで発生するかどうかということを考えると、ふだんの生活にとって邪魔者扱いをされるような巨大なダムを増やせばいいというのでないことは明らかです。新しく居住エリアを開発するところでは、せめて土石流やがけ崩れの直撃を受けやすい場所を避けるような住みかたの工夫をすることが必要であると思います。また、がけ崩れの発生直前や土石流来襲の直前にいわゆる前兆現象であったとみられるものが起きていたことがたびたび報告されています。異常を知らずそれらの現象を少しでも早く感じ取ることができれば命を失わずにすむ可能性も高いことを考えれば、ふだんから身のまわりの自然とふれ合うことで異常でないときの状態を身体(五感)で覚えておくことの重要性はおのずと明らかですね。

最後に、9月の台風16号による集中豪雨の時には西条の助実地区でも写真のような土石流が発生しました。明け方のできごとであったにもかかわらず一人の犠牲者も出さずにすんだ大きな要因として、ひとつめに居住エリアが上流の勢いの強くない場所に展開されていたこと、ふたつめに的確な避難行動をとれたことがあげられます。すぐ身近なところにも災害の発生する場は存在するのです。大きな災害にするのも小さな災害にとどめるのも私たちの対応しだいといえるでしょう。



『新撰組血風録』と私の歴史観の変化

三島 ゆかり (総合科学部 H11生)

私の歴史観を大きく変えた本は司馬遼太郎の『新撰組血風録』である。中2のとき姉が貸してくれたのがきっかけだった。司馬遼太郎の作品を読むのはこれが初めてだった。

この頃の私は(今もだが)歴史についての知識が乏しく、新撰組についてもほとんど何も知らなかった。けれど、知らないなりに漠然としたイメージは持っており、それはよくある子供向けの勧善懲悪型ヒーロードラマの「悪玉」のイメージによく似ていたと思う。当時の私は、幕末史を「倒幕派=善」と「佐幕派=悪」の戦いの歴史だという極端な捉え方しかしていなかったため、反幕勢力鎮圧のために編成された新撰組は、当然私の中で「悪玉グループ」に属していたのである。

しかし、この本を読み進むうちに、そういった先入観はどんどん崩れていった。新撰組は確かに過激な集団で、かなり狂気じみた面も持っていると思うが、それは決して時代を混乱させようとしての行動ではない。むしろ逆で、彼らには彼らなりの「正義」や「理想」があり、それを徹底して貫こうとしてあのような形になったのだ。

私に限らず、人は無意識に歴史の登場人物を「善玉」「悪玉」にふりわけて考える事が多いのではないだろうか。それは、その後どうなったか知っているため、結果として「吉」と出たと思われる方に味方してしまうからだろう。しかし、その当時はそんな将来の事などわかるはずがない。何が「善」で「悪」なのか、判断する基準はないのである。

この本の後に、司馬遼太郎の、幕末を舞台

にした他の小説をいくつか読んだが、それぞれ異なる立場や思想を持った人物を物語の主軸にすえているので、色々な角度からあの時代を眺める事が出来て面白い。ここでは、私が以前持っていた善悪二元論的な歴史の見方は通用しないのだ。この本は、争いに勝った者も負けた者も、一生懸命その時代を生きたことに変わりはないという事を、私に気づかせてくれた。

ついでに言えば、このような歴史観の変化は、私の人生観や生活のあり方にも影響を及ぼした。私は誰かと口論になったりした時に、以前は自分が絶対正しいと思込んで相手の考えをわかろうともしなかったが、現在はせめてわかろうという努力はするようになった。努力をした上で、やはり理解する事が出来なくても、世の中にはそういう考え方もあるのだ、とある程度は納得できるようになった。そのせいで、とげとげしていた性格が少しだけ丸くなり、人間関係が改善したようにも思われる。

そういった意味で、『新撰組血風録』は私の生き方(少々大袈裟だが)を変えた一冊だと言えなくもない。

このコーナーではあなたと本にまつわるエピソードを募集しています。学生、教員、学外の方などどなたでも構いません。飛翔編集室までお問い合わせ下さい。
電話:0824-22-7111(5417)

私のアメリカン・スクール・ライフ

嶋田 沙織 (外国語コース H09生)

私は、父の仕事の都合上家族同伴という、ごく一般的(?)な理由で、小学校4年を終了してからアメリカで暮らすことになりました。一応、アルファベットを勉強し、“My name is Saori Shimada”と“May I go to the bathroom?”=トイレに行ってもいいですか?”(学校で生活する上で必要!?)の二つだけをマスターして日本人は私一人だけという現地の小学校に飛び込んで行ったのです。小学校5年生のクラスでは、まだまだ新しいことに興味を示す年頃だっただけに、みんな興味津々に私と接してくれました。そのうち、まだまだ子どもだった彼女たちは、今日は私が誰と遊ぶのかということで争い始めました。そして、私の英語も上達するにつれ、「日本の雪は赤いって本当?」「日本人は着物しか着ないの?」といった質問をし始め友達も増えてきました(もちろん、私は誤解のないよう、日本の雪も白い、日本人も洋服を着ている、と答えました)。5年生を終了する頃には、先生に「サオリは一年前は英語がまったく喋れなかったのに、今では授業を妨害できるくらい喋れるようになったんだね」と嫌みまで言われるくらいになったのでした。ここで、私がどのように言語を習得していったかを書くのも興味深いと思ったのですが、今回は私がアメリカの学校で感じた事、考えた事について書きたいと思います。

私が住んでいた町では、小学校を終えると地区の小学校がいくつか集まって一つの中学校に3年間、そしてそのままエスカレートで高校へ3年間行きました。そして私もとりあえず英語が不自由なく喋れるようになり、友達も増え、お喋り好きな普通の女の子として

中学校に進学しました(現在の私を知っている人はただ、年齢の若い私を想像してください)。中学校2年生のアメリカ歴史の授業で第二次世界大戦について学んでいた時です。日本の原爆投下について「アメリカは戦争を早く終わらせ、日米の兵士の犠牲を少なくするために原爆を落とす必要があったんだ、アメリカは悪い事はしていない!」という教育方針の先生が多く、その為私はかなり必死に「日本人(特に広島県人)としての意見」を主張する授業になっていました。また、多くの授業は積極的なもので、中学2年生の歴史の授業では生徒を「原爆は落として正解だった」派と、「原爆は落とすべきではなかった」派とに分かれさせ、討論させたこともありました。中学生にとって、先生の言うことは「真実」で、私ともう一人の子を除いて、みんな前者になっていました。でも、私が驚いたのはこのことではなく、その後でした。みんな、授業が終わったらまた今まで通り私の友達として接してくれたのです。そして言ってくれた言葉が「サオリは私達と違った考え方をするけど、サオリはサオリだし、みんな意見が違って当然!!」でした。

アメリカの学校には二つの特徴があったと思います。まず一つは、多くの授業が考える授業になっていたことです。例えば歴史ではなぜ事件が起きたのか、そしてその事についてどう思うかが焦点になっていたことです。テストもこの歴史の授業では、「原爆は落とすべきだったと思いますか。」といった問題でした。また、生徒がこの討論にあまりにも熱中したのを見た先生は予定を変更し、生徒に図書館で情報を集めさせ、きちんとした教

「内なる声」を聴く

学生就職センター教授 田中秀利

字をもとに話を進めるといった討論までしました。先生自身も知らなかった情報等も出たらしく、この授業はととても有意義なものとなりました。

二つ目は友達の言ってくれた言葉にあります。「みんな意見が違って当然！」私のまわりは変わり者が多く、この時期は特に“Don't be same, be different (同じじゃなくて、みんなとは違う人になろう!)”という人が多かったのです。アメリカの場合“いじめ”という言葉は日本の「いじめ」とは少し違った意味になると思います。もちろん、子どもの頃はボスがいて、弱い子を泣かすこともありましたが、でも長くは続きません。なぜなら、誰かがそれを止めるからです。“Grow up! (成長しなよ!)”という言葉で止めるのです。また、中学・高校ではみんなクラスが一日中同じということは無いので毎時間違うクラスメートと過ごすので、どうしても日本のようなクラス全体での「いじめ」は無くなるのだと思います。

今、いじめが問題となっている日本で、考えてみるべきことは受験ではなく授業のあり方にあるのではないのでしょうか。答えが決まっていない問題に取り組める授業、今小学校で総合科目ができたように日本の教育も変わりつつあります。でも、まだみんなと同じがいい、例えばアメリカ人のような格好や教育方法を真似ているだけではないかと思いませんか。私はアメリカの学校で個性の大切さ、自分を知ること、自分に自信をもつこと、自信があるからこそ他人と違う意見も持ちつづけるのだということを学びました。これによってアメリカの学校生活がどんなものか、少しでもイメージができたと思われたら幸いです。

飾り物くらいに思って買った十ドルの一輪車。じっと見ていたら、“挑戦してみよう”という声がある。51才、単身赴任していたデトロイトの秋のことである。

初めてサドルに身体を預けた時、これはダメだ、と絶望感に囚われた。しかし、一点で立つ不安定さに魅せられて、試行錯誤で練習を継続。10ヶ月のブランクを含み足掛け3年、53才、リンゴの花咲く春にはすいすいと乗れるようになった。

成功してみると、“五十三歳の一輪車—という家族史をまとめてみたら”と書名も添えて語りかける声がある。“今年は結婚二十五周年だから妻へのプレゼントにもなる。五・三・一と奇数が並ぶのも面白いぞ”とつぶやきが続く。

その声に素直に従ったら、翌年の早春に現実のものとなった。「五十三歳の一輪車—愛と哀で綴る家族二十五周年史—」である。



家族史をまとめるために一輪車に挑戦した訳でもない、まして、計画的に53才で成功した訳でもない。

素直に内なる声に耳を傾けた、ただそのことが引き金となって成果へと導かれたと、私には思える。内なる声がビジョンを示し、それが目標になって行動を駆り立ててくれたといえるであろう。

「内なる声を聴く」—このことばに出会ったのは、28年前になる。「人間らしさの構造」(波渡昇一著)である。

「内なる声は潜在能力の声である」。「潜在能力は生かされるのを待っている」。さらには、「機能することは「快」である」「機能快は生き甲斐につながる」ともいう。

心が高鳴るのを覚えた記憶がある。その後それらは、常に私のそばにあり、行動の指針として生き続けている。

31才、25年前に、10年日記(今は20年日記)をつけ始めたのも、報告形式の新年挨拶状にしたのも「内なる声」による。その後、家族史の資料になっていく。

それらはヒントとかアイデアと同じなのだろうか。恐らく、過去の経験や問題意識がベースにあるという意味では、同じ土壌に生まれたものであろう。しかし、「内なる声」と私が呼ぶ時には、潜在化していた、生き方に関わるもっと根源的なところの「つぶやき」というにふさわしい。

こころの声は弱くて、デリケートである。通常、一人静かに「自己対話」している時でないと聴けない。暗闇の孤独の中ではじめて聴くことができる性質のものもある。

「21世紀の主人公となる若者達と語り合い

たい」という「内なる声」—アメリカの孤独の中で聴いたその声は、生き方を大きく変えることになった。帰国後2年、定年までの5年を残して33年間勤めた民間企業を辞し、今こうして大学教官ポストについている自分がある。

思いは、「こころの声」に耳を傾けることから始まる。しかもその思いは、自らが欲する生き方を源とする。そしてその「思い」が「生きがい実現」へとつながる。

外には、多様で雑多な情報の渦がある。だからこそ、「内なる声」を聴きそれを指針とする生き方の重みが増してきている、といえないだろうか。



薬害事件と厚生行政

奈良産業大学法学部
天野淑子（助教授）

はじめに

広島大学法学部3回生に学士入学して二度目の大学生活をスタートしたのは、私が30歳を過ぎてからだった。それから同学部の大学院を修了し、関西の大学に就職して5年目を迎えようとしている。

この間、薬害エイズ事件を巡る民事裁判が和解に終わり、刑事裁判の審理が注目されてきた。非加熱剤の回収措置を取るよう製薬企業に指示しなかった厚生省、科学者であることを放棄した医師、利益を最優先した製薬企業。官・医・業の三者の構図は過去も現在も変わることなく、多くの薬害事件を引き起こしている。以下では、カゼに投与される解熱剤の副作用に関する事例を紹介しながら、わが国の薬事行政の現状をみてみよう。



解熱剤とライ症候群

私が法律の勉強を始めたのは、カゼの発熱時に投与された解熱剤の副作用による“ライ症候群”によって娘を亡くしたことに起因する。受診したどの医療機関からも、カルテ、検査結果、レントゲン等の資料を一切入手することができなかったのである。証拠保全によって取得したこれら情報に基づき、医薬品副作用被害救済基金に対して、娘の死因が薬害であったことの認定を求めた。この申請から17年を経た昨年、厚生大臣宮下創平氏から、1999年10月1日付にて、「請求に係る症状が投与された医薬品によるものであるとの蓋然性を認めることも可能と判断される。」として薬害を認定された。

この認定に先立つ1998年12月の時点で、厚生省医薬安全局「医薬品等安全性情報151号」及び同年12月24日付厚生省医薬安全局長「医薬発第1135号」が、医療機関等に対して注意を喚起していた。これは、米国小児科学会が、同年7月に発表した「アスピリンの使用とライ症候群発症の危険性との間にはほぼ間違いなく因果関係がある」との論文を受けての措置であった。厚生省は、医療機関に対して水痘やインフルエンザに罹患した15歳未満の子どもには原則としてアスピリンを投与しないよう、また、製薬会社に対しては「使用上の注意」の改訂を指示していた。厚生省のこれら安全性情報は、同年12月25日の各紙でもすでに大きく報道されていた。

さらに昨年12月20日には、厚生省研究班が、解熱剤とインフルエンザ脳炎・脳症の死亡について、新たな見解を表明した。それは、これまでライ症候群の原因とされてきたアスピリンだけではなく、メフェナム酸（ポンタール等）及びジクロフェナクナトリウム（ボルタレン等）のような非ステロイド系抗炎症解熱剤について、「インフルエンザ脳炎・脳症の重症化に何らかの関連がある可能性が示唆された」というものであった。本件についても、翌21日の各紙で報道されているし、「医薬品医療器具安全情報158号」に詳しい。しかしながら、厚生省のこれら一連の対応は、あまりにも遅きに失したといわなければならないだろう。

医薬品監視センターの設立

確かに、欧米ではライ症候群とアスピリンとの関連を示す多くの疫学調査が公表され、アス

ピリンの使用を中止することによってライ症候群の発症は殆どみられなくなった（詳細は天野他著「こわいカゼ薬」（三一書房）参照）。他方、日本では現在もおおライ症候群（及び原因不明の急性脳症）は減少していないのである。

関西・関東の医師グループである医薬品・治療研究会編集の「正しい治療と薬の情報」（Feb.1997 Vol.12 No.2）は、先述の非ステロイド系抗炎症解熱剤が先行感染症で多用されていることが、ライ症候群を引き起こす原因である可能性の高いことをすでに指摘していた。そして、発熱は生体の防御反応のひとつであることを考えると、急性ウイルス感染症に対する解熱剤の使用そのものが疑問であるとも指摘していた。

昨年12月には、この医師グループによって「特定非営利活動法人医薬ビジランスセンター」が設立された。ビジランスとは“寝ずの番”という意味であり、医薬品を監視する立場から様々な活動が予定されている。例えば、定期刊行物の発行、「疼痛、解熱治療ガイドライン」や「循環器疾患治療ガイドライン」等の出版、研究会、セミナーの開催等々。私自身も、同センター設立メンバーの末席に、法律の専門家の一員として連れてもらうこととなった。科学者であることを忘れない医師達がこんなにも多数いることに力強さを実感している。

医薬品情報の公開

医薬品の本質は「情報」であるといわれるように、医薬品の有効性及び副作用についての十分な情報が国民に公開されない限り、世界に類を見ない大量薬害を発生してきた歴史にピリオッドを打つことはできないであろう。

昨年5月には、長年待ち望まれた情報公開法が成立した。同法の施行が予定されている2001年4月より、国民は、厚生省の保有する製薬企業の副作用情報に対して、開示請求をする権利を認められたのである。ただ、同法は、相当に広範囲な適用除外を有しており、国民にとって有用な情報がどこまで開示されるかが危惧される。特に、法人情報については、秘密にするとの約束で企業から任意に提供された情報を非開示としており、今後問題を残す法律となっている。

しかし、地方自治体における情報公開条例の下では、カルテやレセプトの開示が急速に進んでおり、国レベルでも医薬品情報を積極的に開示せざるをえない状況は整いつつあるといえるだろう。

おわりに

日本の情報公開法及び情報公開条例は、アメリカの連邦情報自由法から大きな影響を受けてきた。しかし、アメリカでは同法に加えて、法律、命令、規則等による広範な情報公表制度も有しており、医薬品情報は相当広範囲に公表されているといわれている。

この情報公表制度についての研究が、これからの私の研究テーマの一つである。今夏から暫くの間、ワシントンD.C.に留学してこれらに関する研究を深めてくる予定である。情報という武器なくしては私達の生命さえも護ることはできないことを知った者の使命であろうか。

（付記）天野先生はわが広島大学大学院社会科学研究科を修了され、現在は奈良産業大学で薬害問題等の専門家としてご活躍中である。投稿頂いた記事は「飛翔」56号掲載の難波先生のエッセイ「病名」の内容に対する科学的な批判と反論の意味をもつ。難波先生のエッセイは実名こそ挙げてはいないが、本人を特定できる仕方、ある女性について批判的ニュアンスを込めて言及している。「飛翔」編集委員会では謝罪と反省の意味を込めて天野先生に投稿をお願いした次第である。（広報委員長）

新任教官紹介

大池 真知子 (人間文化コース)



名古屋で生まれ育ち、お茶の水女子大学に入学したのをきっかけに東京に越して以来、学部、修士、博士とお茶大に在学、卒業してからはお茶大で研究員や助手などをしていました。今回久しぶりに異動があり、広島に来て、いろいろなカルチャーショックを受けています。皆さん、のんびりしていて親切で、じつに暮らしやすいですね。東京に夫を残してきましたが、ええとこじゃけ広島に来てみんな、と誘っているところです。専門はアフリカの女性文学です。どうぞよろしく。

高原 一隆 (社会科学コース)



Ciao a Tutti 平成11年10月から総合科学部に赴任したばかりの高原と言います。出生地は奇しくも現在広島大学が所在する東広島市(旧賀茂郡西条町)であり、西条小学校を卒業した地元中の地元の人間です。ただ、長らく関西・札幌にいましたので、30数年ぶりに故郷に居住する事になり、まるで浦島太郎のような感覚になっています。それほど現在の東広島の町が大きく変わったということでもあります。以前教鞭をとっていた大学は札幌市の東隣にあり、バスと地下鉄で札幌中心部に行けたのと比べると、広島市までの時間・距離・コストの点で相当な遠距離間を感じています。それでも雪のない生活もいかなとひそかに感じながらの生活を送っています。大学のシステムの大きな違いに加えて、赴任早々、独立行政法人化の動きに遭遇し、いささかとまどいの続く現在です。これからどうかよろしく申し上げます。

根平 達夫 (物質生命科学コース)



1999年10月に広島大学に赴任しました、助手の根平達夫(ねひらたつお)です。生まれも育ちも広島ですが、成人して広島近辺に住むのは初めてです。最も好きな化学を仕事にすることができて、毎日がとてもエキサイティングな反面、学生時代にもっと勉強しておけば良かった、と思うこともしばしばです。私はもともと病弱だったこともあって運動(特に野球)を始めましたが、今では「運動中毒かも知れない」と思うくらい、体を動かすことが好きです。イベントがあれば、一声かけてください。

長谷川 博 (生体行動科学コース)



1971年東京都生まれ。小学校教諭を目指し横浜国立大学の教育学部の体育科に入学する。卒業論文で研究の奥深さや面白さなどを知り、同大学大学院修士課程、保健体育学専攻に進学する。その後、東京都立大学大学院博士課程、理学研究科へ進学し、今年修了する。7月より総合科学部の保健体育講座の助手として勤務する。趣味は大自然において自分の体をいじめる(動かす)こと。言いかえれば、様々なアウトドアスポーツに挑戦すること。現在の研究テーマは運動時の体温調節中枢機構について。専門種目はサッカー、スキー。



読者からの声

上神 夕佳 (法学部 H10生)

私は他学部の人間である。それゆえ飛翔とは何かをさえ知らなかった。

飛翔とはその編集を主に総合科学部に委ねられた広島大学総合科学部の広報誌ということだが、辛口でいけばこの冊子は完璧とは言えない。だから無料配布なのだとおっしゃればそれまでだが、その原因は何なのか。飛翔をさらなる良品にするため、いくつか考えられる要因を挙げてみたい。

一つは読者の少なさにある。読まれない文章は育たない。批判されない冊子も成長しない。現在の飛翔関係者や飛翔読者には飛翔を広く知らしめることも求められるのではない。

二つ目の理由としては飛翔編集委員会の形態化が浮かび上がろう。編集室には飛翔と関わらない人物の出入りや居着きが極めて多い。また編集者の中にさえおおよそ資料とはなりえない娯楽刊行物に耽っている者が見受けられる。日本の義務教育の時に朝礼などで校長などが声を大にして訴えていた「けじめ」なるものがここには希薄なのではと思われる。とはいえ、決してやる気のない人間が揃っているわけではなく、だからこそ飛翔編集委員会の皆さんの飛翔をより素晴らしくしたいという意志と行為を全面に押し出せば、編集委員会もさらに活気溢れるのではない。

三つ目は嫌われ編集長の不在である。人間関係を崩壊させることも厭わず、徹底的なだめ出しをする。そのような熱意を持った強気の編集長が必要ではないか。またそのような編集長に悪態をつきながらも記事の書き直しという行為で応える編集委員が理想ではないか。

読者として以上三点が飛翔の不成熟さの所以であると考え、その上で上述のように提案する。そして、うるさいついでにもう一つ提案させていただきます。

どうか、飛翔編集室のお掃除を。

佐藤 匠 (総合科学部H11生)

飛翔とは広島大学総合科学部広報委員会飛翔編集委員会が発行する広島大学総合科学部報である。そのような大層な雑誌に「読者からの声」を書くことになってしまった。雑誌の性格上あまりふざけた事は書けず、参考のため過去の「読者からの声」を読んでみることにした。この「読者からの声」、あるいはそれに類するコーナーが始まったのは飛翔の歴史の中でもごく最近のようで、確認した限りでは44号からのようだ。このようなコーナーはこういった雑誌に割と付き物だから、もっと前からあっても良さそうなのではないか。ページをめくっていると、目次に「自由投稿」とあるのが目にとまった。どうやら過去の飛翔には結構持ち込み記事や自由投稿があったようだ。いくつか読んでみたが難しい内容から身近な話題まで幅広く、中には投稿された記事に対しての反論が次の号で展開されているものもあって面白い。

最近の飛翔では「自由投稿」される事はなくなったようである。この読者からの声が無かったら読者が文章を書けるスペースはないのではないか。実際は飛翔57号最後のページの最後に「投稿記事募集」の欄があるのを見ればわかるように、誰でも飛翔に文章を書くことは出来るのだけど、認知度は今ひとつとといった感が否めない。

今の飛翔は投稿記事不足のようだ。それは単純に考えて読者の参加が少ないということ、良い傾向とは言えない。私は近年減ってしまった読者の参加を補うために「読者からの声」が作られたのではと変に勘ぐってしまった。実際はそんな意図ではないのだけれど。

飛翔の発行部数がどれ位なのかは分からないが、決して少なくない人数が読むわけだからそれなりの影響力は期待できるはず。もっと投稿記事が増えて色々な議論が飛翔の上で起こるようになればいいなと漠然と思っています。

～ 編集後記 ～

吉田昭子 (学生編集委員長 H10生)

今回の編集作業では、今までよりも強く周りのみんなの協力のありがたさを感じた。みんながいたから今号も発行までこぎつけられたのだと思う。ほんとにありがたう。そしてお疲れ様でした。今号の発行にあたり、お世話になった先生方、お忙しい中取材に応じてくださった先生方、心配して助言をしてくださった先輩方にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。そしてななさん、ゆみこさん、けい、ありがたう。

竹田慶 (自然環境研究コースH10生)

今回の編集作業に参加するにあたって個人的に打ち立てた目標が2つあった。ひとつは徹底して良い特集を作り上げること。もうひとつは編集作業を通して1年生に仕事を教えること。前者はそこまで徹底できなかった。一人で造るものではないところに難しさがあり、いろいろ学ぶべき点が多かった。後者にはかなり貢献したつもりだ。(或は勝手にも知れないが)良い人材が育ってくれた。これで心置きなく後を譲れるというもの…

最後に皆さんお疲れ様です。

鮫島 和美 (H11生)

今回の特集記事のプログラム制への移行を考えたとき、「総合科学って何？」という根本的な疑問が壁になった。総科生なら一度は他学部の人や知り合いに聞かれる質問でしょう。(歴代の飛翔編集委員もこの壁にぶち当たっているようで・云々)

力足らずで、満足のいく記事が書けなかったけれど、ただ単に総合科学部ってなんでもやる学部なんだ、と考えるのではなく総合科学部だからこんなことができるってことを他学部の人をはじめいろんな人に知ってもらい、少しでも総合科学の意味を理解してくれることを願っています。

村田圭太郎 (H11生)

僕は前号から編集作業に加わったが、前号も今号も決して満足のいく仕事はできていない。なぜならば僕は編集室には毎日顔を出すけれど、だらだらとすごすことが多く、編集室にいる時間のうち仕事をする時間が圧倒的に少ないからだ。次号は編集にかける時間をもっと増やすことを課題にしたい。

三浦和歌子 (コース変更中 H10生)

編集長ごめんなさい。毎号毎号謝っている気がするのだけど。飛翔を作るのは二回生主体で、というのがいつ頃からあるのか知らないけど、二回生、一回生だけじゃ飛翔は作れないと思う。二回生主体という事で教官となりのある三回生以上が参加しづらくなってはいないだろうか。

編集委員

教官：西村 雄郎 (編集長 社会科学コース 助教授)

石川 雅隆 (外国語コース 助教授)

武田 隆義 (物質生命科学コース 助教授)

事務：柳本 考二

学生：H09生

青松 伴晃 (人間文化)

石川友実子 (社会科学)

田村 久 (外国語)

森岡 ナナ (社会科学)

：H10生

吉田 昭子 (地域文化)

竹田 慶 (自然環境)

有田 夏子 (社会科学)

田嶋 洋平 (社会科学)

近澤 庸平 (生体行動)

三浦和歌子 (自然環境)

：H11生

大谷 貴重 岡田 聖香

鮫島 和美 園田 陽平

船田亜矢子 本田 貴子

松下寿賀子 村田圭太郎

山崎 雄平

：助っ人

前田健太郎 (地域文化 H10生)

飛翔伝言板

・卒業生への通信

卒業2年目以降の方に対しては、希望者のみに送付することになっています。引き続き「飛翔」の郵送を希望される卒業生の方は、下記の住所宛にハガキでご連絡下さい。

〒739-0046 東広島市鏡山1-7-1 広島大学総合科学部飛翔編集委員会

「飛翔」は年2回発行、春と秋に配布します。

<編集委員募集>



えっ!?
飛翔に入りたい?

え!?マジ?!



俺はいつでも君の
参加を待ってるぜ!!



あなたの参加を
お待ちしております。

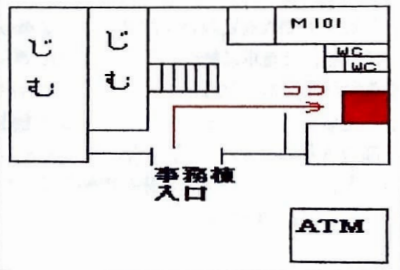


<投稿記事募集>

他の人では体験できないような変わった体験をされた方、周りの人や社会に対して何か訴えたい伝えたいことがあるけれども今まで機会がなくて言えなかったという方、また単に「きれいな写真が撮れたよー」という方、飛翔ではそのような方々のお話やご意見、作品をお待ちしております。皆様からの記事がこの飛翔を面白くするのです!

E-mail : hisyo@hiroshima-u.ac.jp

飛翔編集室の在り処



グラフィア2

ある朝の姿

早朝総科周辺を歩いてみると...



「モーイーガイ」
「まーだだよ」

通りすがりの仲間へ声をかける
おーい、ここに缶を捨てる
みんなていれは恐くない
一つ、まだ一つとやって来た
ゴミの犯藩
ともすれば反乱につながるこの色うさ



「すてい嵐だっかね」
「荒らしの間違いだろ?」

周囲の乱れは己を乱し
己の乱れは周囲を乱す
人の目なんが恐くない
一つ、まだ一つと覚えていく
ゴミの繁栄
無責任反映しているこの有り様



「おはようございます」
「一服していきませんか?」

「ゴミの犯藩」

人の目を盗み盗み
斥候が一つやって来た
よし、ここは大丈夫だ
仲間を呼ぼう



「私たち注目の的かなあ?」
「ハチンコの的になるかもね」

中には仲間意識を持たないゴミも
人間がないと生きられないのよ
危ないことはよしましょう
しがし悪くは感がない



「ゴミ箱目録」
「あー、お腹痛いはい!」